



TITLE:

京大広報 No. 704

AUTHOR(S):

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

CITATION:

京都大学渉外部広報・社会連携推進室. 京大広報 No. 704. 京大広報
2014, 704: 4265-4292

ISSUE DATE:

2014-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196366>

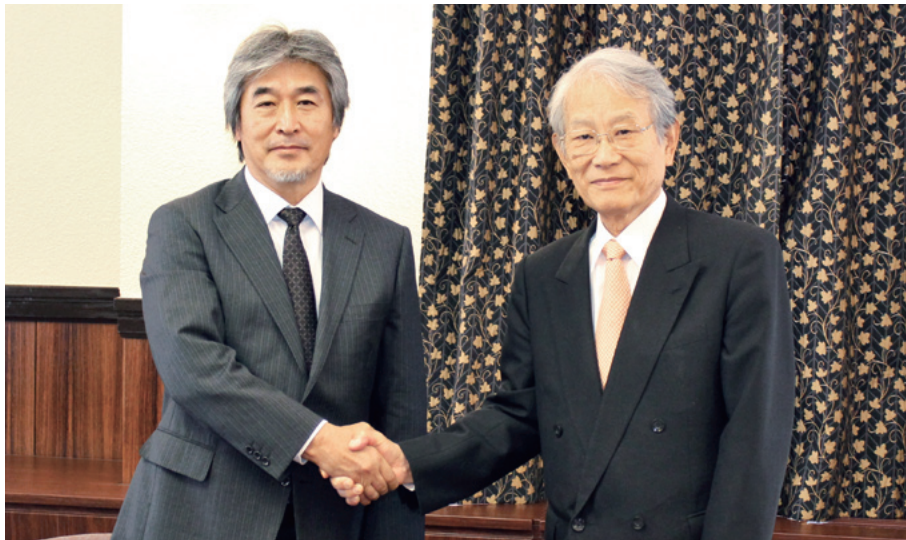
RIGHT:



京大広報

No. 704

2014.10



—退任を前に、総長引継式にて握手を交わす、松本 紘 総長(右)、山極壽一 次期総長(左)—

目次

自由の学風と活力ある京都大学を目指して 総長 山極 壽一	4266
〈大学の動き〉	
山極壽一 理科学研究科教授が第26代総長に就任	4271
理事等が発令される	4272
部局長の交替等	4275
本学と国際核融合エネルギー機構との大学間 学術交流協定の締結式を举行	4276
インドネシア・ボゴールで第21回京都大学国際 シンポジウムを開催	4276
本学とブルネイ・ダルサラーム大学との大学間 学術交流協定の締結式を举行	4277
本学と福井県教育委員会との連携に関する協定 を締結	4277
博士学位授与式を举行	4278
京都大学東京フォーラムを開催	4279
全学教育シンポジウム「大学教育における主体 的な学びとは」を開催	4279
〈部局の動き〉	
寄附講座・寄附研究部門の設置、更新	4280
〈寸言〉	
釈迦に学ぶ転向人生 佐々木 閑	4283
〈随想〉	
国際共同研究拠点としての KIER 名誉教授 若杉 隆平	4284

〈洛書〉	
失われし音を逐求めて 梶井 克純	4285
〈荣誉〉	
森 和俊 理科学研究科教授がラスカー賞を受賞	4286
〈話題〉	
第10回京大病院 iPS 細胞・再生医学研究会を 開催	4286
「エコ文明貴陽国際フォーラム (Eco Forum Global Annual Conference Guiyang 2014)」 に参加	4287
人文科学研究所が第2 回高校生のための夏期 セミナーを開催	4287
森 重文 数理解析研究所教授が国際数学連合 (IMU)の次期総裁に選出	4288
望月拓郎数理解析研究所教授が国際数学者会議 (ICM)で基調講演を実施	4288
ラオス、ベトナムでサマースクール「東南アジア の再生可能エネルギー開発」の研修を実施	4289
京都大学防災研究所公開講座「地元目線で考える 複合災害」を開催	4289
平成26年度総長杯(第1 回ボウリング大会)を 開催	4290
〈計報〉	4291

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

自由の学風と活力ある京都大学を目指して

総長 山極 壽一

この度、第26代京都大学総長に任命されました。大変な重責であると感じを新たにするとともに、伝統ある京都大学を世界の舞台へ牽引すべく、時代を画す新しい仕事をしたいと考えております。

21世紀に入って、大学を取り巻く状況は急速に変化しました。大学の法人化、運営費交付金の削減と競争的資金の拡充、ガバナンスの強化と組織の構造改革、産官学連携体制の推進と国際的競争力の強化など、各大学はそのミッションを明確にし、それを達成するために迅速な改革を要請されています。第2期中期目標・中期計画も終わりが近づき、その改革を加速する期間にある現在、京都大学がいかにかこれまでの改革を促進し、どのような第3期中期目標と中期計画を立てるかが問われています。総合大学として、研究型大学として、京都大学がどう発展すべきか、短期に達成できる目標を持つだけでなく、100年を超える視野を持って臨むべきでしょう。そこで、私は新執行部が進むべき道標と、達成すべき目標について私の考えを述べたいと思います。

京都大学の基本理念と改革の目的

1897年の建学以来、京都大学が掲げてきた基本理念は揺らぎません。日本で2番目に設立された京都帝国大学は、政治の中枢から距離を置き、自由な発想による多様な研究の場として、古くから日本文化の中心であった京都にその拠点を置きました。初代総長の木下廣次は、「自重自敬」、「自得自発」を本学の守るべき精神として説き、それは現在に至るまで自学自習に基づく自由の学風として受け継がれています。本学がこれまでに多くの独創性に満ちた学問領域を切り開き、ノーベル賞をはじめとする世界に冠たる賞の受賞者を数多く輩出してきたのも、この建学の精神が息づいてきた結果であると思います。今後もこの精神に基づき、自由の学風と創造的な学



問の育成を目指して歩んでいく所存です。

一方、この100年で世界の情勢は驚くほど変貌を遂げました。第二次世界大戦に至る数々の戦争を経て、日本は新しい憲法によって生まれ変わり、政治体制も国際関係も一新しました。その後、急速な高度成長期を経て経済大国となり、バブル期を体験して安定した成熟期が到来しました。しかし、東西冷戦の終結後の世界情勢は、それまでの予想に反して、複雑で解決の難しい数々の問題を抱えるようになりました。地球環境の悪化、民族間や宗教間の対立の激化、地球規模の大災害や治癒のめどが立たない疾病の増加、国を超えた企業の活動と資源獲得競争の増加、金融危機と経済の破たんによる社会的格差の増大。こういった劇的で急激な変化の中で、多くの人々は将来の目標を失い、現在の生活に多くの不安を抱えています。急速に機械化、情報化する社会の中で、これまで頼ってきた社会関係が崩壊し、孤独感を抱えて生きる人々が急増しています。理想的な社会とは何か、人間の幸福とは何かを、根本的に考え直す時代にさしかかっているのではないのでしょうか。

この激動期のなかで、大学が果たすべき役割とは何か、時代の趨勢を見極めつつ正しい道を選択していかねばなりません。教育基本法や学校教育法によって大学の役割は教育、研究、社会貢献と定められています。京都大学は総合大学、研究型大学として位置づけられ、活発な研究活動を通じて社会貢献を果たすべきと見なされています。これまで京都大学はその期待にこたえるべく、多くの競争的資金を

獲得して研究環境を整えるとともに、世界最先端の業績を数多く積み重ねてきました。新しい学問分野を構築し、世界をリードする研究を展開し、学際的、国際的な研究拠点をいくつも構築してきました。本学に属する18の研究所や研究センターは全国の共同利用・共同研究拠点として認められ、多くの学問分野で最先端の研究者が結集する創造的・実践的研究拠点として機能しています。学内には学問分野を超えて連携し、教育や研究を行うユニットも作られ、現代の多様で学際的な研究課題に応えるべく活動しています。これらの研究活動の効率性や達成度を高め、組織間の人的流動性を加速させるために、京都大学はここ数年にわたって事務改革や教員組織改革を構想し、実施に移してきました。それは時代の先端を行く改革であり、新執行部もその理念と内容を十分に踏まえながら改革を継続していこうと考えております。

ただ、これらの改革を実施していくためには、共通の理念のもとに全学の合意が得られなければなりません。私自身の総長の任期を超えて、30年後、100年後の京都大学がどうあるべきなのか、という長期的な視野のもとで理念を共有し、それに向かって改革を推進するのではありません、多くの教職員そして社会の合意は得られないでしょう。その共有すべき理念として、私は大学の最も根幹的な使命は教育であり、未来の世界を支える優秀な人材を育てることを教職員の共通の目標としたいと思います。京都大学にはさまざまな部局があります。10の学部、18の大学院研究科等、14の研究所と17の教育研究施設等はそれぞれ分野もミッションも異なります。しかし、学部生、大学院生、ポスドクや任期付きの研究員や助教など、若い世代の教育にさまざまな形で関わり、自らの立場に応じてそれを分担していくことで理念を共有できるのではないのでしょうか。もちろん教育に関わる姿勢や方法には多様な形があります。古今東西の文献を詳しく読解する方法から、実験やフィールドワークを通じたきめ細かな指導、研究者の背中を見せる一見突き放した指導法もあるでしょう。ただ、すべての教職員が学生との対話を重視し、

現代の常識を塗り替える新しい発想を持つ優れた人材を育てることを共通の理念として抱き、その実現に心を砕けば、京都大学はきっと世界に冠たる学問の都となるであろうと私は信じて疑いません。

そのための活動指針を以下に示します。

京都大学の活動指針

まず、私は京都大学を世間から少し距離を置く、静謐な学問探求の場であるとともに、世界や社会に通じる窓として位置づけたいと思います。大学教育が小中高の教育と異なるのは、未知の、まだ正解のない課題に取り組む必要があるからです。高校までの教育は、この世界を形作るこれまでの常識や知識を正しく伝えることで成り立っています。それゆえ、教員は厳格な審査によってその資格を得、教科書の内容は綿密な検定を受けます。しかし、大学の教員は大学独自の基準によって採用が決定され、その教育内容は教員独自の視点が大幅に認められています。それは、教育研究にそれぞれの大学の自治が大きく認められているためです。そのため、大学の教員は自身が学生に何を伝え、どんな能力を伸ばすべきかを常に考え、時代の先端をゆく知識や技術を吸収し、それを自分の考えのもとに消化しておかねばなりません。大学の教育とは知識の蓄積と理解度だけを向上させるものではなく、既存の知識や技術を用いていかに新しい発想や発見が生み出せるかを問うものだからです。教員たちはこれまでの経験を通じて、世界に社会にどんな未解決の課題があるかをよく知っており、そういった課題に挑戦してきた数多くの先達の歴史に通じています。それを学生たちに示しながら、学生たちが自らの能力と可能性に気づき、それを発揮する舞台を整える役割が京都大学の教職員にはあります。すなわち、有能な学生たちが活躍できる世界や社会へ通じる窓を開け、学生たちの背中をそっと押して送り出すことが、私たちの共通な夢であり目標であると言いたいのです。

その窓にちなんで、私は「WINDOW」という標語を作りました。

「WINDOW」

(1) Wild and Wise

最初のWは、Wild and Wise、すなわち野生的で賢い学生を育てようという目標です。第二次大戦後70年を過ぎようという現代、学生たちの生活環境はすっかり変わりました。コンビニエンスストアやスーパーマーケットへ行けば、ほしいものはすぐ手に入るし、インターネットを覗けば関心を引く情報であふれています。自分が何を望んでいるかさえ、コンピュータが教えてくれる時代です。未知の世界に分け入って予想外のものに遭遇し、数ある情報の中から正しい道筋、自分に合った方法を選択していくという経験をする機会が少なくなっています。ぜひチャレンジ精神を大いに発揮して未知のものに挑戦し、賢い判断と優れた意思決定ができるような能力を身につけてもらいたい。そのための実践の場を多く設けようと考えています。

(2) International and Innovation

次のIは、International and Innovationです。現代は国境を越えてめまぐるしく人や物資が流れ込んでくる時代です。日本にいても、そうした国際性豊かな環境とつき合わざるを得ません。まして、自分の発見や発想を世界で試そうと思えば、常に世界の動きに目を配り、世界の人々と自由に会話できるコミュニケーション能力を磨かなければなりません。そして、国際性、学際性に富んだ会話の中から時代を画するイノベーションが生まれるのです。多くの先端的な学問分野を有し、対話を重視した教育研究環境を提供してきた京都大学は最もイノベーションを起こしやすい条件が整っていると言えましょう。今後はその知の遺産を受け継ぎながら、海外の大学や研究機関と人、知識、技術の交流を促進し、さらに国際性を高める努力をしていこうと考えています。

(3) Natural and Noble

Nは、Natural and Nobleです。日本文化の伝統は、自然にあまり手を加えず、自然のありのままの姿から学ぶことを旨とします。京都にはそのような古人

の思考が幾重にも蓄積している場所がたくさんあります。西田幾多郎は哲学の道を歩いて思索を練り、今西錦司は北山から湖北の山々を歩いてパイオニア精神を磨きました。京都大学のすぐ東には吉田山があり、建学以来多くの学徒が散策をする場所として名高く、寮歌にも謳われています。この自然の恵みに満ちた京都の環境を大いに利用しながら、京都大学の独創性は育まれ、多くの新しい思想や学問が生まれたのです。京都大学の学生や教職員は自然に学ぶ心を忘れてはなりません。そして、人間としての品格を常に意識してほしいものです。昨今は、人間性を疑うような事件が相次ぎ、教育者や科学者の倫理にもとるような行為が目立ちます。京都大学もその例外ではありません。自然に学ぶとともに、人間として恥じない行いを心掛け、高潔な態度を身につけていただきたい。全学でその意識を高めるような努力をしたいと思っています。

(4) Diversity and Dynamic

Dは、Diversity and Dynamicです。グローバル社会の到来で、現代は多様な文化が入り混じって共存する時代になりました。これまで日本は均質性をもとに、目的意識を共有する強靱な組織をつくり、急速な経済成長を成し遂げました。しかし、その均質性が今の時代は創造力を弱め、イノベーションの育成を阻んでいるとも言われています。これからの時代に必要なのは、多様なものを受け入れ、それらを組みかえながら、新しい発想を生み出すことでしょう。それにはまず、京都大学が多様な文化や考えに対してオープンであり、多様なものを自由に学べる場所であればなりません。そして、現代は物事や常識が急速に変化していく時代でもあります。さまざまなサブカルチャーがあちこちで立ち上がり、瞬く間に消えていきます。ネットを利用した呼びかけによって民衆が蜂起し、クーデターにつながることもさえあります。そういった社会のダイナミックな動きに目をそらすことなく、自分の存在をきちんと見つめ直すことが求められています。時代の動きに敏感に反応するだけでなく、100年を超える時代の

大きな動きをとらえ、その中で自分と自分の生き方を正しく位置づけてほしいのです。そのために、大学は社会の動きとは少し距離を置いた、多様な思想とその流れが大きな視野で眺められる場所ではなくてはなりません。

(5) Originality and Optimism

Oは、Originality and Optimismです。Originalityすなわち独創性は、京都大学の誇る精神であり、これを涵養することが京都大学の教育といっても過言ではありません。しかし、独創性はそう簡単に育むことのできるものではありません。誰も考えつかないアイデアや、常識を塗り替えるような発想は、実は多くの人の考えや体験を吸収した上に生まれるのです。まずは、すばらしいと感動した人の行為や言葉をよく理解し、それを自分のものにすることが大切です。その人の心や体になってその考えを味わい、そこから新たに自分独自のものを見つける作業が、独創性を生み出すのです。そのためには、他人の考えに同調しつつも、そこに新たな課題を見つけることが大事です。その課題を直接本人や他の仲間と語らい、確かめることによって、しだいに自分の考えを自覚し、固めていくのです。世の中にブレイクスルーを起こすような発想は、決して一人の思考からは生まれません。仲間とそのきっかけになるような考えを繰り返し出し合いながら、思考を深めていく過程が必要です。そしてその語らいは楽しいものでなければならないのです。よく、自分の考えを仲間になり込められて悲観し、閉じこもってしまう学生がいますが、それを明るく乗り越えるような精神力を持たねばなりません。今の日本に欠けているのは、異色な考えを受け入れ、討論を通じてそれを発展させる意欲と、失敗を糧としてそれを成功に導く力でしょう。私たちはもっと自分の失敗や他者からの批判に対して楽観的にならなければならないと思います。京都大学の議論は、伝統的に相手をとことん打ち負かすことをせず、批判を受け入れて互いに高め合う方法をとってきました。だからこそ、分野を超えた討論が可能であり、それが独創性を育む源泉に

なっています。市井にも各分野で鋭い批評家がいって、京都の文化の高い品格を支えてきました。この土壌を十分に活用して、明るい議論を展開し、独創性にあふれた発想を世界に発信し続けようと考えています。

(6) Women and Wish

最後のWは、Women and Wishです。男女共同参画社会の実現が謳われてすでに多くの年月が経過しましたが、未だ道遠しというのが現状です。他の国に比べると、政府や企業で役職についている女性の比率は極めて低く、給料や待遇の面でまだ女性が差別されている面が多々あります。育児休暇の取得率も低く、とくに男性の育児休暇取得率は極めて低く抑えられています。これはまだ、日本社会が真に女性の社会進出を認めていない証です。これからの京都大学は女性が輝く場所であればなりません。そして、男女がその生物学的な差異を乗り越え、互いに協力して平等な社会環境を構築するためにあらゆる努力をしていこうと考えています。男女共同参画社会の実現には、将来に大きな期待を抱き、改善すべき点を一つ一つ解決していく必要があります。希望を持つこと、明るい未来を心に描くことが求められており、その具体的な計画を全学の合意によって進めていきたいと思っています。

「WINDOW」の実現を目指して

これらの目標を実現するために、まず私は新しい執行部を全学体制にいたしました。全部局を構成する学部群、研究科群、研究所・センター群からそれぞれ部局長を経験した理事を選び、外部から文部科学省、厚生労働省の経験者を選びました。男女共同参画を担当する女性の理事を、さらに産官学連携を専任で担当する理事を配置しました。また、これまでに実施してきたさまざまな活動を継続するために、大学改革と法務・コンプライアンスを担当する副学長に留任していただくとともに、新しく教育改革と大学基金・同窓会を担当する副学長を配置しました。

京都大学が世界をリードしてきた独創的で先端的な研究は、さらにその存在力を世界へ示していかな

ばなりません。その環境や体制を整え、多くの競争的資金を獲得し、新たな研究が生まれるための努力を惜しみません。そのためには、教員と職員が一体となって、無駄を省き、効率のいい活動ができるように協力体制を変えていく必要があります。共通事務部の設置による事務改革、学域、学系から成る教員組織改革が現在進行中ですが、なるべく学際的、国際的な研究のしやすい組織・体制作りを心がけてまいります。URAなど中間職を主体としたサポート体制も充実させます。

教育再生は大学改革の大きな柱です。昨今、学問分野の多様化とともに細切れの学問を履修し、狭い教養の知識しかもたずに社会に出る学生が多いことが問題視されています。とくに、高校で選択科目が増えたために、偏った知識をもって入学してくる学生が増えています。大学ではまず、広い教養をしっかりと身につけ、基礎的な学力を磨いて、専門教育へとつながることが必要になります。そのために、京都大学は国際高等教育院を設立し、全学共通科目の選定とカリキュラムの構築を実施しています。初年次の学生が、自分の興味を生かしつつ、体系的なコース履修ができるような改善がなされつつあります。また、部局によっては理学部のように少人数担任が配置され、学生毎に履修指導を行うような仕組みを設けています。今後さらに対話を重視した履修指導を徹底し、確かな科目選択と履修単位の修得を推進していきたいと考えています。京都大学は教養部を設けず、全部局体制で初年次から先端的研究に直接触れられるような教育を実施しています。その試みがポケットゼミで、多様な部局の教員が少人数のゼミを受け持ち、現在世界で行われている最先端の研究を紹介し、実験やフィールドワークを通じてその学問の特色を対話によって学ぶことを実践しています。また、現在進行中の5つのリーディング大学院プログラムは、総合生存学館(思修館)をはじめとして産業界、国際機関に広くつながりを持ち、実践的な研修を通じて社会で活躍できる人材育成を推進しています。こういったこれまでの試みを維持しつつ、基礎・教養教育、ポケットゼミ、専門教育、先

端的研究をうまく組み合わせ、対話を重視した高度な教育を展開していく所存です。

また、国際性の向上は京都大学の大きな課題です。講義の英語化、外国人教員の増加、留学生や日本人学生の留学の増加が求められています。新執行部では、学生や教職員の国際性や対話能力の向上を図るために、海外の大学と結ぶリエゾンオフィスを充実させ、双方向の国際交流を図ろうと考えています。今まで留学や海外への派遣は個人の選択に任されていました。しかし、京都大学の教員は海外の大学や研究機関と多くの緊密なネットワークをもっています。それを大学として活用し、短期や長期の教員、学生の相互交流に役立てようと思います。学生がまとまって教員とともに海外で活動したり、教員同士の連携に学生が加わって講義や単位の相互交換を図ったりしながら、ダブル・ディグリー、ジョイント・ディグリーの推進を図ろうと考えています。また、外国語による対話能力を身につけるため、日本人学生と留学生の外国語による交流を促進したいと思います。そのために、国際性のあるテーマで外国語による公開セミナーや討論会を主催したり、京都の文化に触れる合宿制の交流を実施したりしようと考えています。

近年、産官学連携と社会貢献は大学の重要な使命となりました。国は多額の出資金を大学に与え、大学発のベンチャー企業の設立を推進しています。京都大学もこの出資金による新会社を設立しました。この運営には多くの企業が参入しており、今後どう動かしていくかは大学の存立にとって極めて重要です。新執行部では産官学連携専任の理事を配置し、この理事が産官学連携本部長を兼任して新事業に当たります。こういった事業を推進していくためにも社会との連携は重要です。大学が何をしているか、どういった研究や新しい事業を大学が目指しているかを常に正確に社会へ発信していかなければなりません。そのコミュニケーションの充実を図るために広報室を増強し、メディアと協力して京都大学独自の広報戦略を考案していこうと考えています。また、京都には世界に誇る多くの文化遺産があります。文化の

粋を集めて作られた建築物や廃校になった小中学校が、再利用可能な状態になっています。これらを京都市や京都府と協力しながら教育文化活動が可能な施設として再生させ、他の大学と連携して利用できれば、世界に誇れるさまざまな共同事業を展開できます。私はこれを「京都・大学キャンパス計画」と呼んでおり、外国人の教員や留学生を巻き込んで分野を超えた活動を構想しようと考えています。京都大学に欠けているのはデザインやアートなど芸術系の学部・研究科です。京都には芸術系の大学がたくさんあり、これらの大学と協力することで京都大学の独創性をさらに発展させ、社会に提案することができると期待しています。

近年、文部科学省が大学に強く要請しているのは、総長のリーダーシップを強めるガバナンスの改革です。教授会の役割を定め、全学の合意形成を効率的に進めるための内規変更が求められています。私は、全学の速やかな合意を得るためには、総長が指揮を執る決定事項に教授会の意見を十分に反映させる必要があると考えています。ただ、最近の外部からの要請はその決定までのプロセスが大変短く、部局で十分に審議の時間を取れないことが多くなって

います。大きな部局はさらに複数の専攻や教室に分かれており、意思決定にかかるプロセスが長くなります。このプロセスを短縮し、現状に合ったものにしていかないと、競争的資金の獲得や産官学連携のスピードには対応できません。そのため、新執行部ではなるべく情報開示を早め、案件毎にあらかじめ決定に至る時間を想定し、そこに各部局の審議がどのように関わるかを示して、なるべく全部局の意見を聞く場を設けることにしたいと思います。各部局でもなるべく短期間に意見を集約し、速やかに全学的な議論に載せられるような改革を積極的に進めていただきたいと思います。

現在、大学は第2期中期目標・中期計画の終わりにさしかかり、第3期へ向けて改革を加速する期間にあります。これまで自由の学問の府として、その輝かしい存在を示してきた京都大学の今後の歩みは、全国の大学や教育・研究機関をはじめ、社会から大きな注目を集めています。全学の教職員が京都大学の良さとは何かを真剣に考え、学生を主役とする未来の夢ある京都大学に向かって一体となって取り組めるよう、なにとぞご協力をお願いしたいと思います。

大学の動き

山極壽一 理学研究科教授が第26代総長に就任

10月1日(水)、松本 紘 総長の任期満了に伴い、山極壽一 理学研究科教授が本学第26代総長に就任した。

総長就任式は、10月2日(木)午前10時30分から本部棟大会議室において行われた。

就任式では山極総長が、集まった事務本部の職員約150名に対して就任挨拶を述べ、続いて阿曾沼慎司、稲葉カヨ、北野正雄、佐藤直樹、杉万俊夫、清木孝悦および湊 長博の7名の理事を紹介した。



就任式で挨拶を述べる山極総長

理事が発令される

現理事の任期満了に伴い、10月1日付けで理事が任命された。任期は平成28年9月30日まで。

◆理 事



産官学連携担当
阿曾沼 慎司



男女共同参画・国際・広報担当
(副学長)
稲葉 カヨ



教育・情報・評価担当
(副学長)
北野 正雄



財務・施設・環境安全保健担当
(副学長)
佐藤 直樹



学生・図書館担当
(副学長)
杉万 俊夫



総務・労務・人事担当
清木 孝悦



研究・企画・病院担当
(副学長)
湊 長博

経営協議会委員（学外委員）が発令される

現経営協議会委員の任期満了に伴い、10月1日付けで経営協議会委員が任命された。任期は平成28年9月30日まで。



岩永 勝（新任）
独立行政法人
国際農林水産業研究センター理事長



嘉田 由紀子（新任）
びわこ成蹊スポーツ大学学長



加藤 秀樹（新任）
構想日本代表



門川 大作（再任）
京都市長



黒田 清喜（新任）
株式会社京都新聞社
代表取締役社長 主筆



小長谷 有紀（新任）
大学共同利用機関法人
人間文化研究機構 理事



榊 裕之（新任）
豊田工業大学学長



佐藤 勝彦（新任）
大学共同利用機関法人
自然科学研究機構長



竹中 登一（新任）
公益財団法人
ヒューマンサイエンス振興財団
会長



増田 寿幸（新任）
京都信用金庫理事長



山田 啓二（再任）
京都府知事



鷲田 清一（新任）
大谷大学教授

副学長が発令される

現副学長の任期満了に伴い、10月1日付けで副学長が任命された。任期は平成28年9月30日まで。



大学基金・同窓会担当
植田 和弘（新任）



大学改革担当
大畠 幸一郎（再任）



法務・コンプライアンス担当
林 信夫（再任）



教育改革担当
森脇 淳（新任）

副理事が発令される

現副理事の任期満了に伴い、10月1日付けで副理事が任命された。任期は伊藤副理事が平成28年3月31日まで、津田副理事が平成28年9月30日まで。



桂キャンパス担当
伊藤 紳三郎（再任）



宇治・遠隔地キャンパス担当
津田 敏隆（再任）

教育院長等が発令される

現教育院長等の任期満了に伴い、10月1日付けで教育院長等が指名された。

◆国際高等教育院長



村中 孝史（新任）
任期：平成28年9月30日まで

◆環境安全保健機構長



大寫 幸一郎（再任）
任期：平成28年9月30日まで

◆国際交流推進機構長



森 純一（再任）
任期：平成28年3月31日まで

◆情報環境機構長



美濃 導彦（再任）
任期：平成28年9月30日まで

◆図書館機構長・附属図書館長



引原 隆士（再任）
任期：平成28年9月30日まで

◆産官学連携本部長



阿曾沼 慎司（新任）
任期：平成28年9月30日まで

理事補が発令される

【任期：平成26年10月1日～平成28年9月30日】

総務担当 酒巻 匡 法学研究科教授（新任）
 研究担当 高橋 淑子 理学研究科教授（新任）
 広報担当 高見 茂 教育学研究科教授（再任）

【任期：平成26年10月16日～平成28年9月30日】

総務担当 浅野 耕太 人間・環境学研究科教授（新任）
 教育担当 飯吉 透 高等教育研究開発推進センター教授（新任）
 研究担当 北川 宏 理学研究科教授（再任）
 教育担当 木南 敦 法学研究科教授（新任）
 学生担当 阪上 雅昭 人間・環境学研究科教授（新任）
 財務担当 柴田 章久 経済研究所教授（新任）
 教育担当 杉野目道紀 工学研究科教授（新任）
 施設担当 角 哲也 防災研究所教授（新任）
 財務担当 徳賀 芳弘 経営管理研究部教授（新任）
 国際担当 松田 文彦 医学研究科教授（新任）

部局長の交替等

（新任）

医学研究科長・医学部長

上本伸二医学研究科教授(医学専攻外科学講座担当(外科学分野))が、湊 長博医学研究科長の後任として、10月1日付けで選出された。任期は平成28年9月30日まで。



人間・環境学研究科長・総合人間学部長

高橋由典国際高等教育院教授(人間社会論担当(社会学))が、杉万俊夫人間・環境学研究科長の後任として、10月1日付けで選出された。任期は平成28年3月31日まで。



化学研究所長

時任宣博化学研究所教授(物質創製化学研究系(有機元素化学)担当(有機元素化学))が、佐藤直樹化学研究所長の後任として、10月1日付けで選出された。任期は平成28年9月30日まで。



大学文書館長

伊藤孝夫法学研究科教授(日本法史)が、江崎信芳大学文書館長の後任として、10月1日付けで指名された。任期は平成28年9月30日まで。



（再任）

白眉センター長

田中耕司学術研究支援室特定専門業務職員(東南アジア地域研究(熱帯環境利用論))が、10月1日付けで白眉センター長に再任された。任期は平成27年3月31日まで。

本学と国際核融合エネルギー機構との大学間学術交流協定の締結式を挙行

本学と国際核融合エネルギー機構(フランス・カダラッシュ)との大学間学術交流協定締結式を8月4日(月)に百周年時計台記念館2階迎賓室で行った。

松本 紘 総長と本島 修 国際核融合エネルギー機構長が、今後の本学と機構との交流発展についての意見交換を行ったのち、協定書に署名した。

今回協定を締結した国際核融合エネルギー機構は、核融合エネルギーの科学的、技術的な実現可能性を証明することを目的として、日本・欧州連合(EU)・ロシア・米国・韓国・中国・インドの7極によって設立された国際機関で、フランスの原子力研究センターであるカダラッシュに核融合実験炉"ITER(国際熱核融合実験炉)"を建設し、それを運転する主体となる。



締結後の集合写真

今回の協定締結に伴い、学生のインターンシップや若手研究者の交流、共同研究の実施など、交流を深めていく予定である。

(研究国際部)

インドネシア・ボゴールで第21回京都大学国際シンポジウムを開催

8月18日(月)から21日(木)までの間、ボゴール農科大学国際会議センター(インドネシア・ボゴール)において、第21回京都大学国際シンポジウム「Diversity and Conservation of Asian Primates(アジアにおける霊長類の多様性研究と保全)」を開催した。シンポジウムには、インドネシア、日本、タイ、マレーシア、ベトナム、米国、英国の他、計11ヶ国から150名を超える参加があり、本学からは三嶋理晃 国際担当理事・副学長、平井啓久 霊長類研究所長をはじめ、霊長類研究所、ウイルス研究所、野生動物研究センター、研究国際部から合計約30名が出席した。

本学では、世界に開かれた大学として独創的・先端的な学術研究を積極的に展開していくため、平成12年度より毎年、国際シンポジウムを世界各地で開催している。各年度の開催計画・責任者は学内公募により選出されている。今年度は霊長類研究所を中心として、霊長類の進化ならびに保全に関する新たな総合的認識を探ること、さらには、政治・経済的背景と保全・保護施策の関係を明確にし、研究成果の知見を取り入れることで、より良い環境保全と霊長類保護の方策を見出すことを目的として開催した。

1日目は、Sri Nurdianti ボゴール農科大学数学・自然科学学部長の歓迎の挨拶、三嶋理事・副学長の開会の挨拶で始った。三嶋理事・副学長の挨拶では、ボゴール農科大学への謝辞の後、シンポジウム開催



Nurdianti学部長と三嶋理事・副学長の記念品の交換

の経緯およびテーマについての説明、ボゴール農科大学と本学との研究・教育交流の歴史と意義、平成25年の大学間MoU締結について、また、次世代を担う若手研究者への期待が語られた。

4日間にわたるプログラムでは、ゲノム科学、感染症学、生態・社会、形態、系統発生、系統地理学等をテーマとして、多くの口頭発表、ポスター発表が行われ、日本人霊長類研究者や他分野の研究者に加えて、生息地国霊長類研究者と保護関係者が集結して、霊長類学と植物・環境生態学等の最新の研究成果に関する意見交換を行うことができた。

今回のシンポジウムはアジアにおける霊長類の進化とそのおかれている現状を把握し、保全・保護の新たな取り組みの施策を探ることができる有意義な機会となった。また、これらの発表の一部は国際的にも報道された。

(研究国際部)

本学とブルネイ・ダルサラーム大学との大学間学術交流協定の締結式を挙行

本学とブルネイ・ダルサラーム大学との大学間学術交流協定締結式を8月18日(月)に百周年時計台記念館2階迎賓室において挙行了。

まず松本 紘 総長から今後の両大学間の研究交流発展への期待が表明され、続いてハジブルネイ・ダルサラーム大学長から協定締結の御礼、協力関係の推進についての抱負が述べられたのち、協定書に署名した。

今回協定を締結したブルネイ・ダルサラーム大学は、生物多様性や気候変動など地球環境に関わる問題に取り組むコンソーシアムに加盟するなど、グローバルに活動範囲を広げているとともに、本学の東南アジア研究所、アジア・アフリカ地域研究研究科とは既に部局間協定を締結しており、活発な交流を続けている。



大学間学術協定調印

今回の協定締結に伴い、学生や若手研究者の交流、共同研究の実施など、全学的に交流を深めていく予定である。

(研究国際部)

本学と福井県教育委員会との連携に関する協定を締結

本学と福井県教育委員会との連携協定に関する締結式を、8月18日(月)に本部棟5階特別会議室で挙行了。

本学では、福井県の高等学校から個別にいただいた大学見学や模擬授業の要望に、積極的に協力してきたが、さらに幅広く高大連携事業を展開するために、本学と福井県教育委員会とで協議を重ねた結果、本協定の調印に至った。

この協定は、大学および高等学校における教育の課題に関し、連携して教育および研究の充実、発展に資することを目的としている。また、覚書では、本協定に基づき本学の教育および研究活動の理解を深め、福井県教育委員会が定めた連携指定校と教育の充実発展のための具体的な取り組みを始めることとしている。平成26年度の福井県連携指定校は藤島、高志、羽水、金津、大野、勝山、武生、敦賀、美方、若狭の10校となっている。

協定式には、本学からは、松本 紘 総長、淡路敏之 教育担当理事・副学長、中村佳正 理事補、森



連携協定締結式に出席した、本学、福井県、連携校の関係者 脇 淳理事補、高見 茂 理事補が出席し、福井県教育委員会からは林 雅則 教育長、田中幸治 福井県教育庁高校教育課長が出席された。松本総長および林教育長が協定書に署名後、固い握手を交わし、今後の協力について確認した。また、連携校の先生方も出席された。

今後の具体的な取り組みについては、本学と福井県教育委員会とで検討する予定である。

(学務部)

博士学位授与式を挙行政

9月24日(水)、百周年時計台記念館百周年記念ホールにおいて、松本 紘 総長、副学長をはじめ、各研究科長、理事補出席のもと、博士学位授与式が挙行政された。

松本総長から、代表者に対し学位記(平成26年5月23日付、7月23日付、9月24日付)が手渡された後、総長の式辞をもって終了した。

各分野別内訳は次のとおりである。総長式辞は以下ホームページに掲載している。

http://www.kyoto-u.ac.jp/static/ja/profile/intro/president25/speech/2014/140924_1.htm



松本総長による学位記の授与

学 位	平成26年5月			平成26年7月			平成26年9月		
	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計
博士(文学)	3	—	3	1	—	1	—	—	0
博士(教育学)	—	1	1	—	—	0	1	—	1
博士(法学)	—	—	0	—	—	0	—	1	1
博士(経済学)	—	—	0	4	3	7	3	1	4
博士(理学)	8	1	9	5	1	6	4	2	6
博士(医学)	15	1	16	16	4	20	6	1	7
博士(医科学)	1	—	1	1	—	1	—	—	0
博士(社会健康医学)	2	—	2	2	—	2	1	—	1
博士(人間健康科学)	1	—	1	—	—	0	—	—	0
博士(薬学)	—	—	0	—	1	1	5	1	6
博士(薬科学)	—	—	0	—	—	0	—	—	0
博士(工学)	6	1	7	5	1	6	44	4	48
博士(農学)	6	2	8	5	3	8	2	1	3
博士(人間・環境学)	1	—	1	1	—	1	6	1	7
博士(エネルギー科学)	—	—	0	—	—	0	7	—	7
博士(地域研究)	—	—	0	1	—	1	—	1	1
博士(情報学)	2	—	2	3	—	3	12	—	12
博士(生命科学)	3	1	4	1	1	2	3	—	3
博士(地球環境学)	3	1	4	—	—	0	3	1	4
計	51	8	59	45	14	59	97	14	111



(学務部)

京都大学東京フォーラムを開催

「京の宇宙学」をテーマに、9月4日(木)、第9回京都大学東京フォーラムをホテルニューオータニで開催した。出席者は約350名で、学外からは本学卒業生を中心とした国会議員、企業、官公庁の関係者等に多く参加いただき、学内からは松本 紘 総長をはじめ、理事・副学長、副理事、部局長等が出席した。

本フォーラムでは、松本総長による挨拶の後、篠原真毅 生存圏研究所教授が「宇宙開放系へ広がる持



挨拶する松本総長



講演する篠原教授



講演する中野特任教授



講演する磯部特定准教授

続的發展可能な生存圏－宇宙太陽発電－」と題して、また中野不二男 学際融合教育研究推進センター(宇宙総合学 研究ユニット)特任教授が「700kmの軌道から古事記を探る－京都大学の文理融合－」、磯部洋明 学際融合教育研究推進センター(宇宙総合学 研究ユニット)特定准教授が「フロンティアとしての宇宙からフィールドとしての宇宙へ」と題して講演を行った。

続いて松本総長と篠原教授、中野特任教授、磯部特定准教授の4名により、宇宙という視点や学問がもたらす、人類の長期的なビジョンや可能性などを語るパネルディスカッションが行われた。

講演会終了後に実施した懇親会では、松本総長か

ら挨拶の後に、次期総長候補の山極 壽一 理学研究科教授の紹介があり、山極教授より挨拶があった。その後、ご来賓の山中 伸一文部科学事務次官、山崎 直子 宇宙飛行士・宇宙政策委員、竹本直一 衆議院議員からそれぞれ挨拶があった。



挨拶する山極教授



挨拶する山中事務次官



挨拶する山崎宇宙飛行士



挨拶する竹本議員

また、今回の東京フォーラムの開催に先行して、同日に、経済界で活躍する卒業生が結束して京都大学総長を応援しようという集まりである「京都大学鼎会」の第3回総会が60名の出席者を得て開催され、今後の本学の発展に向けての意見交換などが行われた。



講演会場の様子

本フォーラムは、首都圏における本学の情報発信という目的に留まらず、出席いただいた各界で活躍される本学関係者の結束を図るという効果を期待して実施している。今後もこのような機会を継続的に提供し、本学のプレゼンス向上に努めて行きたいと考えている。

(渉外部)

全学教育シンポジウム「大学教育における主体的な学びとは」を開催

9月16日(火)、桂キャンパス「船井哲良記念講堂」を会場とし、教職員249名の参加を得て、「大学教育における主体的な学びとは」をテーマとする全学教育シンポジウムを開催した。

このシンポジウムは、参加者が教育について全学的な議論や意見を交わすことにより共通理解を深め、今後の教育の改善・充実に資するとともに、部局の枠を越えた教職員の交流の場となることを目指して、

平成 8 年から開催しており、今回で第18回目となる。



北野教育院長による基調報告 学基幹教育院副院長・教授、山田康彦 三重大学教育学部教授、松行輝昌 大阪大学全学教育推進機構准教授および山口裕生 大阪大学学生から、それぞれの大学の実践事例について報告を行い、問題の共有と意見交換を行った。

午後の部は、飯吉 透 高等教育研究開発推進センター長・教授から、「主体的な学びをどう育むかー教育文化・方法・環境・制度の観点からー」というテーマで講演があった。講演に引き続き、「京都大学における主体的な学びとは」というタイトルでパネルディスカッションを行った。コーディネーターは喜多 一 国際高等教育院副教育院長が務め、学内からパネリストとして、松本 紘 総長、上杉

午前の部は、北野正雄 国際高等教育院長による「国際高等教育院における教養・共通教育の改革」と題した基調報告の後、「大学教育における主体的な学び」の実践事例について、谷口説男 九州大



シンポジウムの様子

志成 iCeMS副拠点長・化学研究所教授，SANGA-NGOIE Kazadi 生存圏研究所特定教授，飯吉センター長・教授，溝上慎一 高等教育研究開発推進センター教授，藪本章広 生協学生委員，学外からは午前中に報告していただいた先生方に加わっていただき，多角的視点での議論を行い，「大学教育における主体的な学び」への展望を示した。

今回のシンポジウムを通じて，様々な形で「大学教育における主体的な学び」の方法が活用されることを期待したい。

(吉田南構内共通事務部)

部局の動き

寄附講座・寄附研究部門の設置，更新

7月1日に経営管理研究部・教育部に寄附講座が，霊長類研究所に寄附研究部門が新設され，医学研究科の寄附講座が更新された。また，10月1日に医学研究科に寄附講座が新設された。概要は以下のとおりである。

港湾物流高度化寄附講座(新設)	
1. 部 局 名	経営管理研究部・教育部
2. 名 称 (英 名)	港湾物流高度化寄附講座 [Policy Studies on Port Commodity Movement (Japan Institute of Construction Engineering)]
3. 寄 附 者	一般財団法人みなと総合研究財団，公益社団法人日本港湾協会
4. 寄附金額	総額 9 千万円
5. 設置期間	平成26年 7 月 1 日～平成29年 6 月30日 (3 年間)
6. 担当教員	寄附講座教員(特定教授) 古市 正彦 寄附講座教員(客員准教授) 柴崎 隆一
7. 研究目的	日本経済のグローバル化にともなう港湾物流機能の高度化に関する研究を実施する。

8. 研究内容	近年のコンテナ物流を巡る国際的な状況変化，わが国の経済 産業動向，地方の港湾発着の国際コンテナ航路の状況等を踏まえ，国際コンテナ戦略港湾政策の充実深化に向けた取り組み・施策のあり方について研究を行う。
9. 研究課題	1. グローバル化に伴う国際物流の変化と国際基幹航路の将来動向に関する研究 2. アジア地域の経済統合と国際フィーダーネットワークに関する研究 3. 港湾物流の高度化戦略に関する研究

ワイルドライフサイエンス(名古屋鉄道)研究部門(新設)

1. 部 局 名	霊長類研究所
2. 名 称 (英 名)	ワイルドライフサイエンス(名古屋鉄道)研究部門 (Department of Wildlife Science(Nagoya Railroad Co., Ltd.))
3. 寄 附 者	名古屋鉄道株式会社
4. 寄附金額	総額 2 億円
5. 設置期間	平成26年 7 月 1 日～平成31年 6 月30日(5 年間)
6. 担当教員	特定准教授 1 名 特定助教 1 名
7. 研究目的	京都大学の基本理念が定めた「地球社会の調和ある共存」を目指すという指針のもと，霊長類をはじめとする野生動物に関する教育研究をおこない，地球社会の調和ある共存に貢献することを研究目的とする。
8. 研究内容	絶滅危惧種を対象にした保全と福祉を推進する実践研究を行う。
9. 研究課題	1. 絶滅が危惧される霊長類をはじめとする野生動物を対象とした研究・教育・実践を通じて，その自然の生息地でのくらしを守り，飼育下での福祉をはかるとともに，人間の本性についての理解を深める。 2. フィールドワークとライフサイエンス等の多様な研究を統合してワイルドライフサイエンスと呼べる新たな学問領域を創生し，人間とそれ以外の生命の共生のための国際的研究と国際連携を推進する。 3. 博物館や動物園や水族館等との協力により，実感を基盤とした環境教育を通じて，人間を含めた自然のあり方についての深い理解を次世代に伝える。

標的治療腫瘍学講座(更新)

1. 部 局 名	医学研究科
2. 名 称 (英 名)	標的治療腫瘍学講座 (Department of Target Therapy Oncology)
3. 寄 附 者	中外製薬株式会社
4. 寄附金額	総額 9 千万円
5. 設置期間	平成26年 7 月 1 日～平成29年 6 月30日(3 年間)
6. 担当教員	寄附講座教員(特定准教授) 石黒 洋 寄附講座教員(特定講師) 祝迫 恵子 寄附講座教員(特定助教) 新倉 直樹
7. 研究目的	分子標的治療を主対象に，治療効果予測因子の探索，治療耐性発現機序の分析等を行い，治療の最適化，耐性の克服，新規治療法及び治療コンセプトの開発を行う。これらの研究を通じ，癌治療成績の向上に寄与することを目標とする。

8. 研究内容	癌の分子標的治療に関する腫瘍学研究を行い、ヒト癌の動態を解析する。腫瘍特性と種々の治療法の効果、毒性との関係を検討し、治療効果予測因子の開発、治療の最適化を行う。同時に、分子標的療法の奏効、耐性機序を解析する。それらの情報をベースに、治療の効率化、新規治療標的の探索、治療法開発を行う。また、治療時の患者生体における応答、反応を分析し、免疫、炎症、内分泌学的観点から検討する。標的治療時の腫瘍と生体の相互作用とその変化を把握し、治療反応性、応答性を確認しながら治療を個別化する新しい治療戦略を検討する。広く臨床応用するため、システムを開発し、癌診療の高水準化、効率化に努める。研究成果は国内外に発信し、有用性を様々な医療ネットワークの中で検討する。
9. 研究課題	1・抗VEGF 療法の効果に関わる因子の探索と治療効果・耐性化バイオマーカーの確立 2・抗HER2 療法の効果を予測するmiRNA アレイキットの開発 3・ホルモン療法の血液中効果予測因子の探索研究、及び癌幹細胞を介した作用メカニズムの研究 4・血液中DNA メチル化マーカーを用いた乳癌の早期診断 5・標的治療薬による癌・間質反応の研究

発達障害支援医学講座(新設)

1. 部 局 名	医学研究科
2. 名 称 (英 名)	発達障害支援医学講座 (Department of Neurodevelopmental Psychiatry, Habilitation and Rehabilitation)
3. 寄 附 者	全国建設組合連合運営協議会 株式会社広域総合事務支援センター 株式会社オフィス・トリプルワン・セブン 株式会社講談社
4. 寄附金額	総額 1億2千万円
5. 設置期間	平成26年10月1日～平成29年9月30日(3年間)
6. 担当教員	寄附講座教員(特定准教授) 佐藤 弥 寄附講座教員(特定助教) 魚野 翔太 寄附講座教員(特定助教) 義村さや香
7. 研究目的	1. 発達障害者の精神生理学的特性を明らかにし、各種リハビリテーション・介入技法の妥当性と適用性を明確にする。 2. 啓蒙と高度人材育成による社会貢献を行う。 3. 発達障害の精神保健に関わる研究者や医療専門職の養成に貢献する。
8. 研究内容	1. 発達障害者の社会的不適応の原因や二次障害(うつ症状、被害念慮など)の発症と密接に関連するストレス特性や心的外傷反応の解明を進め、臨床的介入の基盤づくりを行う。 2. 研修事業・ケース検討事業等を実施し、関係諸機関へ情報発信するとともに、高度な専門人材育成を促進し、各現場でのより適切な介入・支援を可能にする。また、公開講座等を通じ一般市民への啓蒙を行う。 3. 当専攻の院生の研究活動・研修事業への参加・協力体制をとり、発達障害者の精神保健に関する研究者や医療職の養成に寄与する。また、学部学生・院生に対して臨床認知科学や精神保健に関する教育を行う。
9. 研究課題	1. ヒトの表情および感情の認知処理に関する精神生理学的・臨床認知科学的研究 2. 発達障害者のストレス特性、心的外傷反応、記憶特性に関する精神生理学的・臨床認知科学的研究 3. 発達障害への各種介入技法の妥当性の検討 4. コメディカルほか支援関係者への研修事業等による高度な専門性を持つ人材の育成 5. 公開講座等による発達障害の社会的啓蒙

寸言

釈迦に学ぶ転向人生

佐々木 閑



私は現在、禅宗の一派、臨済宗妙心寺派が設立した花園大学で教鞭をとっております。釈迦という人物に惹かれ、その思想や伝記、教団の運営原理などを研究しています。釈迦という人はもともと、北インドの小さな国の王子として生まれ、栄耀栄華の花道を約束された人でしたが、青年期に人生観が変わり、世俗の幸福をすべて放棄して出家者となりました。ボロボロの格好で何年間も修行生活に専心し、ついに菩提樹の下で悟りを開いてブッダと呼ばれるようになったのです。その後は死ぬまで、自分の悟りの体験を人々に説いてまわりました。

王子の身分を捨て、住所不定無職の出家者になったのですから、釈迦の人生は「転換の人生」です。一本道を上へ上へ昇っていくというのではなく、かといって現状維持をあきらめて小さく退縮するのでもない、一つの道から全く別の道へと、目的変更して一気にジャンプするという大胆な選択をしたという意味での「転換」です。

一国の皇太子であった人が、「出家して修行者になります」と言って勝手に出奔して、それが許されるところがインドらしい。インドは古来、自分で意を決して生き方を変える、という行為を高く評価する国です。「この世には社会通念としての現実的幸福の他に、宗教的理念で達成される幸福というものもあって、そちらを選択するのは立派なことだ」と考える気風があるのです。今でも、功成り名を遂げた紳士淑女が、ある日突然そのすべてを投げ出して身一つの巡礼となり、残りの人生を旅回りで暮らす、ということがあります。別の道へのジャンプで価値観を転換し、新たな目標に向かってリスタートする。そういった行為が許される社会だからこそ、仏教のような類例のない宗教も生まれてきたのでしょう。

こんな釈迦の「転換の人生」は私にとってなにより

の工業化学科に入学したのですが、理系の道で挫折して、工学部卒業後に文学部に入り直した人間です。転向前後は劣等感にさいなまれる日々でしたが、移った先の文学部で釈迦の人生を知り、その姿に励まされ、心の傷を少しずつ治しながら今日まで歩んできました。今になってみると、理系時代に学んだ様々なこと、たとえば科学的思考法とか科学史的視点が、私の活動のあらゆる面で役立っており、「無駄ではなかった」とつくづく思いますし、大学時代に思い切って文系にジャンプしたことも、正しい選択であったと納得しています。

ここで私が申し上げたいのは、インドとは違ってそう易々とはジャンプが許されない日本人の一生の中で、大学時代というのは例外的に進路変更のしやすい場であるということです。もちろん通常の社会でも転職ということはあり得ます。しかし自己の価値観を別のものにリセットして、全く新しい生き方を一から歩み始めるという大幅な人生の転換は、この、17、8歳から22歳ころまでの、感性がまだ枯れ始めておらず、社会的責任がなく、無鉄砲の許される若年者が、およそ世のあらゆる思想、学問に触れる機会を与えられる、大学という場において初めて可能になるのではないかと思います。その転向が結果として吉と出るか凶と出るか、それはお釈迦様でも分かりませんが、とにかく一方向に揃って流れる社会に渦を起す貴重な駆動力にはなります。私はその大学の「転換機能」によって救われたのだとつくづく感じます。

最近キャリア教育とかいって、大学に入った時から人生全体の設計図を引かせて、それに合わせて自分を作り上げていくという教育が盛んです。確かにそれもいいのですが、大学には、人生のリセットを支援するという働きがあるということも認識しておいていただきたいのです。一流企業を目指して歯を食いしばっていた一回生が、卒業式では風来の聖者になっていた、というのも「あってよい話」だと思います。

(ささき しずか 花園大学教授、昭和54年工学部卒業 昭和57年文学部卒業 昭和59年文学研究科修士課程修了)

随想

国際共同研究拠点としての KIER

名誉教授 若杉 隆平

経済研究所を退職して日が浅いので、在職中のことになりますが、私自身の研究生活を振り返ってみると、外国研究者と共同研究をする上で、経済研究所が蓄積してきた世界的な知的ネットワークと優れた研究環境から、ほとんど



一方的とも言える多大な恩恵を受けたように思う。慶應義塾大学から経済研究所に招かれた時に私が取り組んでいた研究テーマは、国際貿易と企業に関する研究であった。この課題は21世紀に入ってから国際経済学の主要研究テーマの一つであり、多くの研究者が理論研究・実証研究の両面から最先端を競っていた。欧米では研究者がある程度の規模の研究者グループを組織して、早くから共同研究を進めていたが、それに呼応して日本でも小規模なものではあったが、中堅・若手研究者が中心となった研究グループが形成され、私はそのまとめ役に当たることになった。

多くの研究と同様、この研究テーマでも最新の理論研究とデータを用いた実証研究の成果を持ち寄って議論するコンファレンスや学会セッションがアメリカ、ヨーロッパの随所で開催され、私にも研究成果を発表するよういくつかのお誘いがかかった。その中で特に印象深く思い出されるのは平成20年9月にスイスの首都・ベルンで開かれたワークショップに招かれたときのことである。ヨーロッパの研究者達はヨーロッパ各国の異なる統計データを丹念に接続し、精緻な実証分析を行っていた。かなりの難題と思われたが、各国の研究者が和気藹々としながら厳しく共同研究に挑む様子を見て、大いに啓発された。アール川のほとりにたたずむ美しく静かな街で行われた熱気溢れる研究討論は今でも忘れることができない。

研究成果を報告し合うミーティングはその後も次々と引き継がれ、私もその一翼を担った。経済研

究所を定年退職するまでの間、何回か欧米や東アジアの研究者を京都にお招きし、ワークショップやコンファレンスを開催し、共同研究を深めることができた。経済理論研究の国際的拠点として経済研究所はKIERの名で世界の研究者に広く知られていたことから、声をおかけした多くの外国研究者がすぐに参加を表明してくれたことは心強いことであった。

平成20年頃になるが、経済研究所は文部科学省の進める共同利用・共同研究拠点に名乗りを上げていた。経済研究所が国際的研究拠点として積み重ねてきた業績と貢献に鑑みれば認定は間違いないと確信はしたものの、万が一のことがあってはならない。平成21年5月に文部科学省に呼ばれた選考ヒアリングには、緊張の面持ちの所長(西村和雄名誉教授)に連れだって臨んだが、その席上で、「拠点認定によって国際共同研究がどのように進展するかを具体的に述べよ」との質問が飛んできた時には、経済研究所にとっても好意的な問いかけをいただいた気分であったことを思い出す。首尾良く平成22年度に文部科学大臣の認定を受けることになったのは経済研究所にとってうれしい事であったが、所員であった私にとって国際共同研究を進める上でさらに多大な恩恵に浴することになった。共同利用・共同研究施設の認定を受けたおかげで、他大学・研究機関の研究者が経済研究所での共同研究に参加することがそれまで以上にやりやすくなったことは間違いない。共同研究拠点ということで他大学・研究機関に呼びかけ、京都のみならず各地でコンファレンスを共催した。横浜で開催したコンファレンスでは国際的に活躍する米・中の研究者達が参加し、その成果は後に国際学術誌「The Japanese Economic Review」にまとめて収録されることになった。その時に始まった中国研究者との共同研究は今も続いている。

日本の経済学研究を弛まざりリードし、実績を重ねてきたKIERに寄せられる国際共同研究拠点としての役割と期待は、小さくないと想うことしきりである。

(わかすぎ りゅうへい 平成24年退職 元経済研究所教授 現経済研究所客員教授 専門は国際経済学)

洛書

失われし音を逐求めて

梶井 克純

私は大気化学の研究者です。大気中でおこる化学反応を追跡したり、その結果生成するプロダクトであるオキシダントやエアロゾル(PM2.5など)について調べています。

ここでは、研究とは全く違った趣味の話を書こうと思います。小学生の頃、いわゆるラジオ少年でした。真空管でアンプやラジオを作って楽しんでいました。中学生のときにお小遣いをためてラックスという会社のCL30という真空管のプリアンプを買いました。しばらくそのアンプで音楽を楽しんでいましたが、大学生になり、研究者となり、結婚して子育てまっしぐらの時代を経るうちに、そのアンプの存在を失念しオーディオの趣味からはすっかり遠のいてしまいました。今から10年くらい前でしょうか、生活が少し落ち着いてきたので、再びオーディオでも楽しもうと思い、実家においてあったはずの例のCL30について尋ねたところ、とうの昔に粗大ゴミに出されていました。失望感のうちに再び真空管アンプを手に入れたいという思いが沸々とわいてきます。

何も考えずにEL34という五極管を購入して毎日眺めていました。肌で触れるとその無機質な涼とした冷たさが伝わってきますが、ひとたびヒーターに電流が流れるとまるで生き物のようにエネルギーが湧いてくる不思議なガラスの筒です。そのうち不思議なことにその真空管からすばらしい音が聞こえてくるような気がしてきました。多分「この真空管でアンプを作るとどんな音が出るのだろうか」と考えあぐねる日々だったのでしょう。そこでとうとう真空管アンプを作ることにしました。その後色々なアンプを作りました。最後に行き着くのがシングルアンプと呼ばれるものです。真空管のアンプでは出力が高インピーダンスなのでスピーカーにつなぐにはどうしても出力トランスというものを使わなければなりません。シングルアンプではそのトランスの制約により、あまり高い音や低い音が伝わらなくなり

ます。だいたい50Hzから50kHzの音が出れば大変優秀なアンプということになります。

気合いを込めて838という送信機に使われていた大型の真空管でシングルアンプを作りました。その音を聞いた瞬間、最初は拒否反応から始まります。DCアンプやデジタルサウンドに慣れ親しんだ耳には、低音も高音も出ていない、いわゆるナローレンジの音に驚かされるのです。しかし、その音を聞いているうちに「そうだこれは昔よく聞いた音だ」と気がつきます。実際の楽器から奏でられる音はそのような帯域の音であることも後からわかりました。私たちはデジタルサウンドを聴きすぎているうちに本当のアコースティックな音ではないものを聴き、良い音だと思い込んでいるのではという気がします。ちょうど、化学調味料でうまみ成分が強調された料理のようです。どこかで真空管アンプの音を聴くチャンスがあれば、是非そのアンプでアナログ音源(LPレコード等)を試してみてください。少し専門的になりますが、倍音という音が真空管アンプでは基音に重畳されて出てきます。電気的には歪みとして処理されているものですがこの倍音がのると音はとても心地よいものになります。真空管を愛してやまない人々はこの倍音に魅了されているのかもしれません。

もう一つ思うことがあります。日本人が文化的な影響を与えたものの中には、秋葉原、お宅、などとともにWalkmanが挙げられるそうです。好きな音楽を個人で楽しむ文化を世界に広めたという訳です。昔は、音楽はスピーカーから流れてきてそれを皆で共有しながら楽しんだものです。昨今はイヤホンやヘッドフォンを使い個人で楽しむものへと変わりつつあるように思います。決して懐古主義ではありませんが、音楽を共有するという機会がもう少し多くても良いのではないのでしょうか？そのような時間の中から思わぬ発見もあるかもしれません。アナログ音源や真空管が好きな方がおられましたら、是非とも声をかけてください。一緒に楽しみたいものです。

(かじい よしずみ 地球環境学堂教授 専門は大気環境化学)



栄誉

森 和俊 理学研究科教授がラスカー賞を受賞

このたび、森 和俊 理学研究科教授が、平成26年のラスカー基礎医学研究賞を受賞され、授賞式が9月19日(金)に、ニューヨーク・ピエールホテルにて行われた。ラスカー賞は、米国で最も権威のある医学分野の賞で、基礎医学と臨床医学のそれぞれの分野において卓越した業績を挙げた研究者に授与される。今回の受賞は、米国カリフォルニア大学サンフランシスコ校ピーター・ウォルター教授と2人での共同受賞である。



同教授は、昭和56年京都大学薬学部を卒業、同58年同大学大学院薬学研究科修士課程を修了、同60年同大学院博士後期課程を中途退学し、同年岐阜薬科大学助手に採用された。昭和62年京都大学薬学博士の学位を授与された後、平成元年米国テキサス大学博士研究員、同5年株式会社エイチ・エス・ピー研究所副主任研究員、同8年同研究所主任研究員を経

て、同11年京都大学大学院生命科学研究科助教授、同15年大学院理学研究科教授となり、今日に至っている。

同教授は、小胞体と呼ばれる細胞内小器官(膜で囲まれた細胞内構造物)に立体構造が異常になったタンパク質が蓄積していることを感知するセンサー分子IRE1を、酵母を用いて世界で初めて発見し、小胞体ストレス応答という新たな研究領域を開拓した。その後、哺乳動物小胞体ストレス応答の分子機構を解析し、高等動物では、小胞体内に立体構造の異常なタンパク質が蓄積することに対して、より巧妙で多重な備えが用意されていることを明らかにした。

小胞体ストレス応答が様々な疾患の発症・進展に関与することが明らかにされており、治療や予防への応用が期待されている。

今回の受賞は、それらの業績に対して授与されたものであり、大変喜ばしい。

(大学院理学研究科)

話題

第10回京大病院 iPS 細胞・再生医学研究会を開催

医学部附属病院は、京大病院iPS細胞・再生医学研究会を7月31日(木)に芝蘭会館にて開催した。同研究会は、同院におけるiPS細胞、ES細胞および体性幹細胞等を用いた再生医学研究の向上ならびに成果の普及を図り、ひいては医療の発展に貢献することを目的として、平成21年11月に発足したものである。第10回目となる今回の研究会では、学内外から医療関係者等130名余りの参加があった。

研究会では、三嶋理晃 病院担当理事・副学長/医学部附属病院長の開会挨拶の後、一瀬 篤 厚生労働省医政局研究開発振興課長より「再生医療等安全性確保法」について、江崎禎英 経済産業省製造産業局生物化学産業課長より「再生医療の制度整備と事業展開－法制度の見直しを踏まえた関連産業の育成－」について、山地 昇 アステラス製薬研究本

部再生医療ユニット長より「アステラス製薬の再生医療への取り組み」について、畠賢一郎 株式会社



高橋教授による特別講演

ジャパン・ティッシュ・エンジニアリング常務取締役事業開発室長より「再生医療の産業化への取組と新制度への期待」について一般講演が行われた。

引き続き、高橋 淳 iPS細胞研究所教授より「iPS細胞を用いたパーキンソン病治療」について特別講演が行われた。

(医学部附属病院)

「エコ文明貴陽国際フォーラム(Eco Forum Global Annual Conference Guiyang 2014)」に参加

7月11日(金)、12日(土)に中国貴州の貴陽にてEco-Forum 2014が開催され、森 純一 国際交流推進機構長が参加した。Eco-Forumは中国政府の指示の元に開催されている、環境問題を話し合うフォーラムで、毎年、貴陽にて開催されている。今回の会合には、京都大学、北京大学、清華大学、浙江大学、北京師範大学、北京林業大学、貴州大学、四川大學、メルボルン大学、ベルリン自由大学、エルサレム大学、サンクトペテルブルグ大学、ノートルダム大学(米国)が参加した。



Eco-Forumメイン会場

本学からは、清華大学との深圳における共同研究、昆明理工大学との昆明での共同研究、北京大学と本学の学生の交流活動(PUKU)の紹介、そして本



参加大学代表者の紹介

学のグリーンキャンパス実施のための環境賦課金についての説明を行った。

今回の大学会合では、北京大学からGreen Alliance of Universities for a Sustainable Future(国際環境大学連合(仮訳))の設立について提案があり、本学としても参加のための検討を行うことを表明した。

開催地となった貴州大学の鄭強学長は本学の卒業生であり、最終日には貴州大学による晩餐会が開催され、参加者一同懇親を深める場となった。

本フォーラムへの参加は、今後、中国を中心とする環境問題研究や教育協力への布石となるものと期待される。

(研究国際部)

人文科学研究所が第2回高校生のための夏期セミナーを開催

人文科学研究所では8月8日(金)に、東アジア人文情報学研究センター大会議室において、第2回高校生のための夏期セミナー「漢字文化への誘い」を開催した。

本セミナーは、将来を担う高校生に漢字の面白さ、奥深さをわかりやすく紹介し、漢字文化全般に関心を深めてもらおうと企画したものである。関東から九州まで23名の高校生の参加があった。

富谷 至 東アジア人文情報学研究センター長の挨拶に始まり、「書き取りだけが漢字じゃない!」をテーマに、井波陵一 教授「平林(タイラバヤシ)か平林(ヒラリン)かー漢字の属性と戯れる」、武田時昌 教授「漢文博士が愛した数式ー漢文での算数」の講演を行った。講演後、センターの見学を行い、最後の座談会では熱心な質問や議論が行われた。参加者か



セミナーの様子

らは、「タイトルから想像したより遙かに勉強になりました」、「京都大学で研究をしたいという気持ちが芽生えました」等の感想があった。

(人文科学研究所)

森 重文 数理解析研究所教授が国際数学連合(IMU)の次期総裁に選出

数理解析研究所の森 重文教授が、国際数学連合(IMU)次期総裁に選出され、8月10日(日)、11日(月)に韓国慶州で開催された第17回IMU総会において決定された。任期は平成27年1月1日から平成30年12月31日まで。



IMUが設立されて以来、日本人で初めての総裁就任となり、また、アジアから総裁が選出されるのも初めてである。

国際数学連合(IMU)とは、数学における唯一の

世界的学術機関であり、国際科学会議(ICSU)の構成機関の一つである。4年に1回、国際数学者会議(ICM)を開催し、その初日に数学におけるノーベル賞といわれるフィールズ賞などの授与を行う。

総裁就任にあたり、同教授は「重責ではあるものの、これで数学に少しは恩返しが出来ると思いましたので承諾致しました。アジアから初の総裁という、事の重大さに身が引き締まる思いです。アジアを始め世界中の多くの新興国で数学が発展していますので、その振興にも寄与したいと思います。」とのコメントを出している。

(数理解析研究所)

望月拓郎数理解析研究所教授が国際数学者会議(ICM)で基調講演を実施

望月拓郎教授が、8月13日(水)から21日(木)まで、韓国のソウルで開催された国際数学者会議(ICM)において基調講演を行った。同会議は4年に1回開催され、開会式では数学におけるノーベル賞といわれるフィールズ賞等が授与される。今回、同教授は21人の基調講演者の1人に、日本人で唯一選出された。

同教授の基調講演は、「Wild harmonic bundles and wild pure twistor \mathcal{D} -modules(調和バンドルと



講演する望月教授

純ツイスター \mathcal{D} -加群の研究)」という題目で行われた。同教授はこの理論によって、柏原正樹 名誉教授が提案した難問「柏原予想」を解決し、内外で高く評価されている。また、これらの壮大



ICMの基調講演会場全景

な結果は21世紀の数学の基盤の一部になると期待されている。

さらに同会議では、同じく数理解析研究所の熊谷 隆教授が招待講演者として講演を行った。

(数理解析研究所)

ラオス、ベトナムでサマースクール「東南アジアの再生可能エネルギー開発」の研修を実施

大学の世界展開力強化事業(「人間の安全保障」開発を目指した日アセアン双方向人材育成プログラムの構築)による、サマースクール「東南アジアの再生可能エネルギー開発」の研修をラオス・ベトナムで行い、工学部・農学部・経済学部・文学部・総合人間学部の学生15名が参加した。なお、この研修は国際交流推進機構との連携による国際交流科目として実施され、所定の要件を満たした場合、一般教養科目2単位が認定される。

研修は大垣英明 エネルギー理工学研究所教授、石原慶一 エネルギー科学研究科教授の引率および藤枝絢子ASEANセンター学術研究支援員の協力により、移動日を除き8月12日(火)から16日(土)までラオス国立大学(NUOL)、8月18日(月)から24日(日)までベトナム国家大学ホーチミン市校工科大学(HCMUT)において実施した。

第一週目のラオスでは、NUOLの学部生とともに、持続可能エネルギーについての講義と、水力発電所、ビール工場への訪問を通して、各種エネルギーの基礎知識やエネルギー効率改善、今後それらの利用を拡大するための社会的・経済的・政治的・技術的諸課題について学んだ。また、第二週目のベトナムでは、HCMUTの学部生と太陽光、風力、バイオマスエネルギーの基礎講義を受講した後、太陽光発電(Intelベトナム工場)、風力発電、石炭火力発電を見学し、それぞれの長所短所について実地で学んだ。

本学とそれぞれのホスト校の学生が3名ずつ5グループに分かれて、ラオスの未電化地帯の電化対策



風力発電所の見学風景



石炭火力発電所見学風景

や、ホーチミンへの電力供給などについてグループ研究を行い、成果発表を行った。

また、ラオスでは発電所建設のために滞在されている本学卒業生との懇談も行った。

本研修は、本学と現地の学生にとって、貴重な経験となり、臨地研修を通して、エネルギーと環境についての生きた知識を得ることができた。また、海外滞在が初めての学生もいたが、すぐに現地に馴染み、現地学生との交流を深めることができた。

(学際融合教育研究推進センター
(人間の安全保障開発連携教育ユニット))

京都大学防災研究所公開講座 「地元目線で考える複合災害」を開催

防災研究所は、8月29日(金)に高知県高知市のサンピアシリーズにて第25回京都大学防災研究所公開講座(共催:高知県 後援:自然災害研究協議会)を開催した。

これまで公開講座は京都で開催してきたが、本年度は出前講座ということで、南海トラフの巨大地震・津波、台風・高潮災害、土砂災害といった様々な自然災害リスクをかかえる高知県で開催することに

なった。

予想される複合災害の姿，またその防災対策について，「『災害のメカニズムを学び，防災対策に役立てよう！』－地元目線で考える複合災害－」と題し，ハード対策だけでなく，避難，さらには事前復旧・復興計画まで視野に入れた幅広い観点から議論した。

当日は，定員270名の会場は満席となり，参加した一般住民の方や学生の皆さん，防災業務に携わる民間企業，各種団体，市町村および県職員の方々は最後まで熱心に聴講された。

また，昨年度同様に，より多くの方に視聴いただけるようインターネット中継を実施し，約400名が受講され防災への関心の高さを実感した。



参加者多数で盛況な会場の様子

防災研究所では，防災・減災の一助となるよう，今後もこのような取り組みを続けていく予定である。

(宇治地区事務部)

平成26年度総長杯(第1回ボウリング大会)を開催

9月10日(水)午後6時30分から京劇ドリームボウルにおいて，平成26年度総長杯(第1回ボウリング大会)が開催された。39チームが参加した会場内では，ストライクやスベアが出るたびに笑顔でハイタッチを交わす姿があちこちで見られ，おおいに盛り上がった大会となった。

試合終了後の表彰式では，山崎宏記 総務部人事課福利厚生室長より，優勝杯，表彰状が授与された。

大会結果は次のとおり。



大会風景

<団体>

優勝：情報部「情報部ボウリング同好会」チーム
(1,321ピン)

上原孝俊，岡田悦子，櫻井恒正，高見好男

準優勝：エネルギー理工学研究所「エネ研」チーム
(1,182ピン)

千住 徹，長崎百伸，紀井俊輝，増田 開

<個人>

男性 優勝：櫻井恒正(情報部)(393ピン)

女性 優勝：市川温子(理学研究科)(307ピン)



優勝した情報部「情報部ボウリング同好会」チーム

(総務部)

訃報

このたび、^{まがり さぶろう}鉤 三郎名誉教授、^{おの こういち}小野紘一名誉教授、^{いとかわ よしのり}糸川嘉則名誉教授、^{たか ぎ ひさお}高木久雄名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に各氏の略歴、業績等を紹介します。

鉤 三郎 名誉教授



鉤 三郎先生は、2月18日逝去された。享年91。

先生は、昭和20年9月東京帝国大学第一工学部造兵学科を卒業、同22年7月に京都大学工学研究所(原子エネルギー研究所への改組を経て、現在はエネルギー理工学研究所)研究補助に採用され、その後同講師、同助教授を経て、同35年1月に教授に就任され、放射線応用工学研究部門を担当された。先生は、昭和52年より同54年までの2年間、研究所長として所内の管理運営と研究設備施設等の充実に努められるなど、研究所の発展に多大の貢献をされた。昭和61年3月に停年により退官され、同年4月に京都大学名誉教授の称号を授与された。

先生は、電子顕微鏡の無機化学への応用や、質量分析計、炭素黒鉛材料、化学プラズマなどの広い分野において多くの独創的な研究業績を挙げられ、その発展に寄与された。中でも、放射線損傷その他の理由で格子欠陥の生じた金属の欠陥位置およびその進行を電子顕微鏡で連続追跡する手法を創出され、また従来の常識を破る可搬型の常圧気体直接導入型の質量分析計の開発と、その化学プロセスのモニタリングへの応用を進められ、さらに触媒法による高品位黒鉛の製造法を発明し、黒鉛化温度の著しい低減化に成功され、化学プラズマを利用した種々の金属酸化物単結晶の析出の研究などで、国際的に高い評価を得ている。

(エネルギー理工学研究所)

小野 紘一 名誉教授



小野紘一先生は、7月31日逝去された。享年72。

先生は、昭和40年、京都大学工学部土木工学科を卒業、同42年に同大学院工学研究科修士課程を修了、同47年にカナダ・トロント大学大学院Ph.D.課程を修了し、Ph.D.の学位を取得された。株式会社鴻池組を経て、平成8年京都大学教授に就任し、工学研究科土木システム工学専攻複合基盤システム工学講座を担当された。平成13年より京都大学国際融合創造センター(融合部門)教授を併任、同16年に工学研究科都市環境工学専攻の専任教授を経て、同17年定年により退職され、京都大学名誉教授の称号を授与された。また、平成17年6月から同22年3月まで舞鶴工業高等専門学校長を務められたほか、同24年1月より本学

研究国際部および学術研究支援室の上席専門業務職員を務められた。

先生は、土木工学の幅広い分野において、特に、コンクリート工学、トンネル工学に関わる特筆した研究を進められ、コンクリート覆工と地山の連携を取り入れたトンネル支保機構の考案、火災に対するトンネル構造の安全性向上などにおいて多大の成果を挙げられた。

また、環境とエネルギーに関する産学連携研究会会長や新都市社会技術融合創造研究会副会長、国際トンネル協会首席副会長を務められるなど、産学や産官学の連携の推進と国際活動を実践し、土木工学のみならず日本社会の恒久的な発展に多大な貢献をされた。

(大学院工学研究科)

糸川 嘉則 名誉教授



糸川嘉則先生は、8月31日逝去された。享年80。

先生は、昭和34年3月京都大学医学部を卒業、同35年4月に同大学医学部助手に採用され、同40年12月医学博士の

学位を授与された。昭和49年1月同講師、同年5月同助教授、同54年6月同教授に昇任され、衛生学講座を担当された。平成7年京都大学評議員に任命され、同9年3月同大学を停年退官され、名誉教授の称号を授与された。その後、同年4月より福井県嘱託として福井県立大学新学部設置準備に尽力され、同11年4月福井県立大学教授に就任、同17年3月同大学を定年退職され、同大学名誉教授の称号を授与された。

先生は、衛生学および栄養学の領域において顕著な業績を挙げ、代表的なものはビタミンの神経機能に関する研究、生体の微量成分の作用機構に関する研究、栄養状態、健康状態の解明に関する研究、環境汚染物質の生体影響に及ぼす影響に関する研究、医療・保健・福祉の連携に関する研究等である。

先生は、一貫して生活に関係する環境衛生問題に貢献し、わが国ならびに世界の医学の発展や、国民保健の向上に大きく貢献したものであり、その功績は顕著である。

これらの業績により、紫綬褒章、瑞宝中綬章、日本栄養・食糧学会功労賞、日本マグネシウム学会功労賞、フランス医学会銅賞、ベルツ賞を受けられた。

(大学院医学研究科)

高木 久雄 名誉教授



高木久雄先生は、8月31日に逝去された。享年89。

先生は昭和26年3月京都帝国大学文学部文学科を卒業後、引き続き同大学院に同31年3月まで在籍、その間、同

28年4月から京都府立西京大学文家政学部助手、同年11月から同講師として勤務された。昭和30年12月京都学芸大学助教授に就任、同32年8月に、京都大学教養部助教授に転任、同年9月から同34年8月までアレキサンダー・フォン・フンボルト財団の給費生としてドイツ連邦共和国への出張を経て、同46年3月には京都大学教養部教授に昇任し、同63年3月停年により退官され、同年4月1日京都大学名誉教授の称号を授与された。本学退官後は、京都外国語大学教授に就任、理事、評議員、学長などを歴任され、平成12年3月に同大学を退職、同年4月1日同大学名誉教授の称号を授与された。

先生の本学における教官歴は30年余の永きにわた

り、その間、教養部においてドイツ語の授業を担当するとともに、文学部および大学院文学研究科において講義ならびに研究指導を行ない、後進研究者の育成に力を尽くされた。その傍ら先生は、教養部の各種委員長を務められ、教養部の運営に多大なる貢献をされた。

専門の研究においては、ドイツ近・現代文学、ことにゲーテとカフカを中心にすえたドイツ小説の研究に従事され、すぐれた論文を発表されるとともに、多くの翻訳を通じて、ドイツ文学・思想の理解と普及に寄与された。学会活動も広範囲に及び、ドイツ文学研究および教育における顕著な功績と学界への多大な貢献により、平成13年6月財団法人ドイツ語学文学振興会より感謝状を贈呈された。

以上のように、先生は、多年にわたって本学における研究・教育に従事され、学生の指導、研究者の育成に尽くし、本学に貢献されるとともに、ドイツ文学研究の発展にも寄与された。

(大学院人間・環境学研究科)